

信毎俳壇

今井 聖選

着ぶくれて大阪弁でまくしたて
 (安曇野市) 丸山 進也
 枝葉焚き二つ芋焼き畑終ふ
 (長野市) 中村 侑子
 仏飯を下ろして今朝の雑炊に
 (須坂市) 牧野 勇永
 稲作り一途に空寿たまはりのぬ
 (佐久市) 神津 武士
 冬されの井戸の綱無き滑車かな
 (上田市) 竹内 重美
 裸木の影薄き道ただた歩む
 (佐久市) 上田 美紀
 冬の雨浅間蓼科視界霧
 (佐久市) 柏木 利晴
 割烹着揃ひて城の冬曲
 (富士見町) 鬼束 淳子
 小春日や窓越しに会ふ祖父の手よ
 (佐久市) 黒岩明日美
 猫車が車線変更冬たんぽぽ
 (飯島町) 横山 真弓
 佳作
 留守居して早き昼前の蒸饅頭
 (小海町) 依田 久代
 朝霧の田圃に鷺の影立ちぬ
 (松川村) 岡 豊村

選評

一句目、「着ぶくれて」「まくしたて」ところに大阪のイメージが濃厚。街と人のエネルギーも感じられる。二句目、その年の畑仕事の終わりをきめ細かく描いた。「枝葉」と「芋」への視線が日常

感を伝えて見事。三句目、死者に供えた食べ物を下ろして生者が頂く。二者の交流がそこにある。四句目、農業一筋に90歳を迎えた。憂いも特段の喜びもなく淡々と。

神野 紗希選

天に飛鳥地に走獣の無き雪野
 (中野市) 横田 仙壽
 看板を隠す大雪ミルクティー
 (長野市) 宮沢 信博
 寒禽のこゑ登山靴古ひけり
 (松川村) 中野 重行
 極月や咎なきガザの児の涙
 (上田市) 竹内 重美
 戦死者の曇てくそくと冬銀河
 (松本市) 小林 幸平
 化身とか前世とか鵜の瞳
 (長野市) 小池 秀雄
 生薪の干割れる音や小六月
 (佐久市) 神津 武士
 底冷えに胎児の形で一度寝かな
 (長野市) 松本 宏要
 聖夜劇星を指さすだけの役
 (長野市) 福沢 ナナ
 許すにも限度地球は雪もなし
 (伊那市) 中村 茂子
 佳作
 飯縄山の雪肌迫る手術前
 (長野市) 勝山 学
 をちこちに火を焚く人の今朝の冬
 (大町市) 原田 勝

選評

一句目、鳥も獣も見当たらない雪野の静謐。「飛鳥」「走獣」、漢語の韻律が格調高く引き締め、命を許さぬ冬の厳しさを立ち上げた。二句目は下五への展開が新鮮だ。雪に覆われた街に立つ実感が、ミルク

ティーのぬくもりによって刻まれた。三句目、冬鳥の鋭い声が、厳然たる自然への畏怖を呼び覚ます。四・五句目は世界への祈り。咎なき子らを戦死者にせぬために何ができるか、今年も考え続けたい。

坊城 俊樹選

トラックの秋のバトンが冬の手に
 (坂城町) 宮下 和夫
 熊の子のうれしくてうれしくて里
 (長野市) 武田 芳子
 献花なき人の死幾つ冬の街
 (千曲市) たじまたける
 弥陀何も語らず風の枯はちす
 (埴玉真美里町) 川崎 彰典
 夫婦して役者の名出ぬ夜寒かな
 (佐久市) 吉岡 徹
 夙や苦難の民に道与へん
 (塩尻市) 五条 さと
 サンタを信じた孫サンタとなりし
 (飯綱町) 仲俣 一重
 洋梨とショートメールにあの日の風
 (飯島町) 横山 真弓
 遮断機が下ろされたまま冬に入る
 (長野市) せきたつお
 北風が浅間風となる厨
 (佐久市) 神津 武士
 佳作
 矢印に添って曲つて枯野道
 (松川村) 中野 重行
 ふくよかな残り香席に映画の日
 (下諏訪町) 中村 久

選評

一句目、リレー競技のバトンをつなぐ様子。前走者のバトンは秋のもの。それを次の走者に渡した瞬間に冬となる。やや機知めくが実感もあり斬新さも。二句目、熊の子が親熊とともに里に出てきてしま

った。うれしくてうれしくてはしゃぐ。人間界では切実な問題だがこの子熊に何の咎めがあるのか。三句目、やはりウクライナやガザ地区の戦争を思う。献花も置かれない戦場の街にも冬がやって来る。